

クトゥルフの呼び声

# Call of Cthulhu

## 京都哀妖変

シナリオ集 by 偉鷹 仁

光の蜘蛛

焦点の合わない目を虚空に据えながら開いた口からは次のような言葉が、表情にふさわしい、無感動な声で発せられる。

「私はピーター です。このディスクは圧縮されました。以下の問題に正解すると復旧します。第一問、……………」

第一問が発せられると急に、男は表情を取り戻し、青くなったその顔色で目を白黒させながら、「さ、3番」と答えた。

すると、再び無表情になり、

「ピー、残念でした。このディスクは以後使えなくなります。」

その瞬間、男の体が痙攣したと思うと、世にも哀れな悲鳴を上げながらPC達の見守る前で見られる縮み、最後にはピンクやグレーが入り混じった、奇怪な色のキューブへと変貌していった。

ふと気がつく、PC達は全身に悪寒と発熱を覚える(プレイに非協力的なプレイヤーがいた場合は、そのPCだけに感染を施すのも手でしょう。また、全員が協力的であった場合、無理に感染させなくとも良いでしょう。)

この時点では、PC達は特に被害を被らない。

佐藤恭一 22才 男  
身長 175cm 体重 48kg 血液型 B型

生年月日 1975年12月3日 射手座  
最近著しく株の上がってきた、3Dデジタル・アーティスト。河原町の河原町通りと蛸薬師通りの交差する角の「ギャラリー・ミラーージュ」で展覧会を開いている。細身で、神経質そうな見た目とは裏腹に、おっとりして柔らかい物腰の人物である。細く、色の薄い髪をサイド・バックにまとめており、瞳はヘイズル。

マスター用情報

「キューブ」となってしまった男の名は、佐々木光夫。持っていた鞆などを調べると、コンピュータ機器メーカーに勤める平凡なサラリーマンである事が分かる。

が、彼の周辺を調べると、この会社の従業員の内、すでに3人が行方不明になっているのである。

社内では、時折、先ほど男が上げた悲鳴のような特異な音を聞いたというものもあり、明らかに「キューブ化現象」が起こったように見える。

少女を探そうとした場合、PCの全員に、幸運ロールを(そのまま)振ってもらい、成功したPCはその少女を知っている。

半年ほど前に見た週刊誌の、「巷のアイドル」といった感じのページ

シナリオ3「光の蜘蛛」

イントロダクション

1997年8月、日本国内のあるサーバーに、一つのホームページが登録された。それは一見、ただの健康診断ができるプログラムに過ぎない。3ヶ月を経過し、現在までのアクセス数は32、これといった特色の無いサイトとしては妥当な数であろう。

9月半ば、このマイナーなサイトに一人の少女がアクセスした。数日後、部屋には奇怪な色のキューブがひとつ、床の上に転がっているばかりであった……………」

プレイヤー用情報

プレイヤー・キャラクター達は、最近著しく株の上がってきた、デジタル・アーティストの佐藤恭一より招待状をもらい、展覧会の会場である、河原町の河原町通りと蛸薬師通りの交差する角の「ギャラリー・ミラーージュ」に来ていた。

レーザーを多用した3次元グラフィックが有名な彼の今回の目玉は、「花憐」と銘打たれた、等身大の少女の3D像である。

像は、長い黒髪を特徴的な髪飾りでまとめあげた、ポニーテールの少女が幾つもの風景の中を漂って行く、幻想的なものであった。

他には、幾何的な図形を組み合わせた「輪廻」や、ホログラフィを生かした「NATURE」、流れる水を現したという「爆流」など、個性的な作品が軒を連ねている。

しばし、作品群を眺めていると、(できれば探偵系のPCに、でなければ全員でもかまわない)恭一は「じつは、頼みがあるんだ……………」と、話し始める。

彼は、この少女像のモデルに恋をしているというのだ。だが、そのモデルとは、ホームページ上の風景写真ページに載っていただけの少女で、何とか調べてサイトの開設者に連絡を取ったが、「そんな写真は載せた覚えが無い」という返答があるばかりであったらしい。

事実、この像のような少女を載せたホームページは存在しない。

恭一の頼みとは、この少女を探し出して欲しいという。

PC達が話を聞いていると、一人のサラリーマン風の男が近づいてくる。ふらりふらりと歩いて、PC達のすぐ側まで来ると突然、「ピーーー・ガー……………」と、おかしな叫び声をあげる。

耳をつんざくこの音に耐えると、男が立ちすくんでいるのが見える。

## クトゥルフの呼び声

に、簡単なプロフィールと写真が載っていたのを思い出す。

特にその髪飾りは特徴的なので、はっきりと思い出す。

柳原ちはる 16才女  
身長162cm 体重38kg 血液型A型

生年月日1982年8月30日 乙女座  
私立清澄学院に通う、一年生の少女。  
英会話同好会に所属し、最近学校のLL教室でネットサーフィンなどに興じていた。おとなしい、優しい娘である。  
普段は長い黒髪をポニーテールにしている。数年前、まだ元気だった父が中国から持ち帰った髪飾りを気に入っており、髪留めとして使っている。父は勇、母は美千代。

彼女の家を調べた場合、パソコンが一台あり、近くには、いくつかのホームページアドレスを書いたメモが見つかる。

家族構成は、母一人子一人の母子家庭で、同好会がないときはバイトをして家計を助けていたとの事であった。

所有しているパソコンは、バイト先の酒屋が、親戚から古い型のものをもらったが使い方が分からないといってくれた物であるという。

コンピュータ・ソフトウェアロールで成功すると最新のアクセス履歴は「金剛塾」という団体が運営するサイトである事が解る。

試しに、このサイトにアクセスすると、健康診断のプログラムが組まれており、身長体重血液型や生年月日、20ほどの問診項目を入力する欄があり、これを返すと現在の状態を示すグラフィックが表示されるようになっていいる。

が、これを動作させると、周囲のガラスなどの薄くて硬いものから、「ピーー・ガーー」という音が響き始める。

これは、佐々木光夫の発した音声と同じ物であり、ホームページ上のプログラムが動作すると、健康状態を示すグラフィックを重ねて、魔法陣が、見えないように表示され、空間をシステムに見立てた、呪的なウィルスが発動する仕組みになっている。

むろん、クトゥルフ知識の無い人物には、このプログラムを見ても、無害なものしか見えない。

一応、コンピュータ・ソフトウェアロールに成功すると、関係ないロジックが組まれている事を発見する事が出来、それが、グラフィックの表示と、ピーブ・ミュージックにすると呪文のような音声のPCMデータとなるビットデータがある事に気づく。

クトゥルフ技能を持つキャラクターならば、ロールに成功すると「ツァールの子供たち」と呼ばれる従属種族の召喚呪文に似ている事が解る。

柳原ちはるをネット上で調べていると、時折、彼女らしい影がブラウザの画像に表示されたり、差出人不明の電子メールが届いたりする（もちろん彼女が出した物だが）。

彼女はこの時、暗い小部屋に閉じ込められているような状況で、時々窓が開いたように、こういったメッセージを出す事ができるだけだという。

ちなみに、佐々木やその同僚を調べると、やはり「金剛塾」のページにアクセスしていた事が分かる。

このページが登録されているのは日本、しかも同じ京都市内であるらしい。

また、似たような事件を調べ始めると、ここ3ヶ月内に、世界中の街で起こっている事が分かる。

英語版のページのほうにアクセスした、海外の人物がどうやら例のウィルスに感染したらしいのである。

「ツァールの子供たち」とは、いわば陽電子生命体とでもいうべき知的生命体で、電気伝導体の中を自由に動き回れるらしいが、それ以外の空間ではそう長くは生きられない（封印中は別である）。

それゆえ召喚場所はケーブルや、電気回路の中などに限られる。また、みずからの体自体にプログラムを刻む事ができ、これにより、論理的にしか働かないようなプログラムに呪的效果を加え、現実空間に働きかける能力を有する。

アナライザなどで金剛塾を調べると、確かにページの登録されたサーバは京都市内にあり、アクセスもできる。しかし、NTTにはそんな回線は登録されていない。

NTTの回線を調査する事に成功すると、だいたいの場所が特定できる。が、そのあたりには企業はおろか、民家すらも殆ど無い山の中であった。

だが、その中に一件だけ、民家があった。

すでに廃屋と化したその屋敷は、現実にとってみるまで、なぜか分からないのだが、付近の送電線が切れて、蔵の中に垂れ下がっていた。

通常、電話の信号線はNTTが監視しており、多少の抵抗の変化も発見されてしまう。

また、電気の送電線もそれに近い。

だが、この現象は、そのどちらにも感知されなかった。

送電線は蔵の中の骨董品の山に続いており、その中の、割れた壺の上でとまっていた。

探索者達が中に踏み込もうとすると、付近の送電線が、まるで触手のように襲ってくる。

危機を察知した「ツァールの子供たち」が、排除にかかるのである。

おもやの中を捜せば、様々なガラクタが転がっており、PCが何かしようとしたときには、大概の物がそろう。

これをすべて何とか（絶縁被覆された導体の中に封印するなど）すれば、まだ「消化」されていない人々は回復し、シナリオは終了である。

探索者達が、恭一を紹介すると、ちはるのほうも彼を知っており、うまく行く。

#### 事件の真相

全ては、「ツァール教団」=「金剛熱」の行った事が元である。

彼らは、主であるツァール、双子の卑猥なる者を召喚する事が最終目的である。

しかし、「ツァール教団」は、現実の人間達ではなかった。

人間でないどころか、蛋白質生命体ですらない。

「ツァールの子供たち」自身が、その正体だったのである。

3ヶ月前、台風が来たおり、京都北部にある山中で、一本の送電線が切れた。

これは、このあたりでも少ない、古い民家の蔵に当たり、中に収められていた、ある壺を叩き壊した。

この壺は、まだこの家が栄えていた数十年前、当時の当主が始めた骨董趣味で集めたものの一つであり、何でも中国から取り寄せた物であるらしかった。

が、この中には、「ツァールの子供たち」が、封印されていたのである。

「ツァールの子供たち」は、よろこびいさんと送電線にのり、ひとしきり遊んだ後で、絶縁被覆の弱った通信線にまで入り込み、世界中を駆け回り始めたのである。

そして、インターネットに入り、様々な窓となるホームページの情報を取り込んだ。

自分達の表現手段をもった彼らが次にとった行動は、論理空間からの、現実空間への干渉であった。

ネット上で拾った「ピーター」というコンピュータウィルスや、健康診断のプログラムを自身に取り込み、あたかもサーバーがあるかのように、ホームページをかまえ、獲物がかかるのを待った。

彼らの主、「ツァール」を呼び出すための触媒たる人間を操るための実験である。。

今の所、人体に影響を与える方法までは得る事ができた。

だが、精神を取り込んだあと、人体に自分達が入り込む事はいまだできずにいた。

彼らに取り込まれた精神は、順次、彼らの養分として、消化されて行く。

柳原ちはるも例外ではない。だが、彼女にはなぜか、その番がなかなか回ってこなかった。

それが、取り込まれる直前まで身につけていた髪飾りのおかげである事を彼女は知らない。

あの髪飾りは、じつは、ツァールを信奉する「チョー・チョー」達の用いる祭具であるらしかった。

それがゆえに、彼女だけは常に、順番の一番最後にまわされ、多くの人々が「消化」されるのを眺めてきた。

そうしているうちに、「ツァールの子供たち」が使っている、ネットを移動する手段を多少なりともマネできるようになり、「窓」から外を眺めている時に、恭一がそれを見つけたのである。

事態が片付いた後、誰かがパソコンを起動させ、「ピー！」という音とともに「げーっ、ピーター が出た！！！」という台詞でしめくくするのも良いでしょう。

私立清澄学院南校（共学校）

